野川（東京都）

川端祐太郎

川と人間の活動は，切っても切り離せない関係にある。かつて栄えた四大文明は皆，大河の周辺に出来上がっていったというし，そのような大河でなくとも，川の存在は，人間にとって生活に，また農業をはじめとする多くの活動に，必要不可欠なものであるといえる。

東京を流れる川にも，荒川や江戸川などいくつもの川があるが，その内のひとつ，多摩川の支流に，野川がある。野川は，国分寺から，多摩川に合流する世田谷までのおよそ 20km の距離を流れる川で，この川に沿うように国分寺崖線と呼ばれる斜面が続いている（三鷹市教育センター)。

私は，この野川に幾度か触れる機会があった。15 年ほども前のことであるが，当時私は深大寺に住んでおり，近くにあった野川公園へ家族で足を運ぶことも度々あった。残念なことにその時の記憶は薄く，野川のこともおぼろげにしか覚えていないが，それから 10 年以上して，私はたまたま野川公園に程近い高校へ入学した。この高校には毎年野川公園を走る行事があり，野川沿いの散歩道を友人と走ったことは今も記憶に新しい。また，私が日本史を教わったその高校の教師が武蔵野の戦跡や遺跡について調べており（彼自身は本も出版している)，授業の一環として野川周辺の遺跡や水車小屋，かの新選組，近藤勇の墓所などを巡った。その時，野川の傍にはわさび田やほたるの里があるということも知り，時代を超えてこの野川は人々にとって大切な存在であったということが感じられた。

野川周辺の遺跡を訪ねた，と述べたが，野川流域では多くの遺跡や昔の墓が発見されている。野川の自然，野川と人との関わりについての詳細な資料が，三鷹市教育センターによってインターネット上に公開されているが，このホームページによれば，遺跡に関しては 4 つ，横穴墓群に関しては全部で 6 つのものが発見されているという。その内，私が訪れたのは，出山横穴墓群という横穴墓群の 1 つであったと思われる。中はやや暗く，いかにも墓という雰囲気が漂っていたことを覚えているが，この横穴墓に入るため，階段を上っていった記憶もある。実際，これらの横穴墓群は，先に述べた国分寺崖線で発見されたものであるというから，斜面に大きく穴が開いたような形になっているのだと思われる。

さて，今回私が野川を訪れたのは，12 月の終わりであった。人の姿はまばらだったが，親子連れの姿や写生をする老人，どこかの学校の部活動らしき姿もあった。野川公園は何度も訪れていた場所のはずだったが，それでもあらためて野川を見ると，新たな発見が多くあった。その 1 つが，水の透明感である。川辺に立って水を見ると，川の底までかなり

見通すことができたし，野川公園にあるいくつかの湧水の流れを見ると，その澄んだ水は更に際だっていた。その日は雲ひとつない快晴であったということもあってか，流れには太陽の光が注ぎ込み，浅瀬では川底の藻や小石も照らし出されていた。三鷹市にはわさび田，ほたるの里といったものがあるということだったが，やはり，野川は実際きれいな水が流れ込む河川なのだ，ということをここであらためて確認することができた。しかし，三鷹市教育センターの作った野川のホームページによれば，かつては生活排水によって野川が汚されたこともあったという。現在かなりその水質は改善されたとのことで，今回観察した結果からもそれは十分確認できたが，近年では湧き水の量が減少傾向にあるという新しい問題が発生し，そのために，わさび田を維持するのが現在では難しくなってきているという。

野川を観察した結果として 2 つ目に挙げられるのが，生物，特に鳥が，何種類か見られたことである。野川公園は「野鳥」や「湿性植物」などの区域が用意されている自然観察園的性格をもった場所であるから，野鳥がいることは当然といえば当然であるが，少なくともその日の観察時という短い時間だけでも，カルガモ，コサギ，ハクセキレイ，そして東京では定番ともいえるカラスといった，4 種類の野鳥が，川辺で観察できた。一方の河岸から対岸までにかけてカラス，コサギ，カルガモの 3 種類が一度に観察できたこともあったが，その場では鳥達が互いに干渉し合う様子はなかった。また，野川では残念ながら確認できなかったが，野川に注ぎ込む湧き水の流れには，アメンボや魚の姿も見られた。また，私の伯父も，私が生まれて間もない頃にザリガニを捕っていた経験を話してくれた。多くの生命が生活する空間として，野川は重要な存在となっている。

また，人が川との共存を目指しているという印象も，野川の観察からは感じられた。先に述べた野川公園の自然観察園的な要素もそうであるが，人間の生活に潤いをもたらす存在としての要素と同時に，自然環境を（ある程度人工的な形とはいえ）残そうとした結果として，今の野川があると思われる。たとえば野川公園には野川の概要や地図など，いくつかの看板が立てられていたが，その中に，公園利用者に対しての湧き水周辺での注意事項を示したものがあった。そこには，その水が飲料水としては不適であることや，怪我を防ぐために裸足で入らないように，といったような，人間の安全を考えたものが書かれる一方，ペットを入れないように，おむつをつけたまま水に入らないように，といった，おそらく水を汚さないためのルールも見られた。また，魚のために作られた小川について説明した看板も興味深かった。というのは，「ほたる川」というその川は，魚が産卵時に上ったり，野川が氾濫したり，水が枯れたりした時に魚が避難できるように作られた，つまり，人為的に魚を保護するための手段として作られたというのである。単純に川そのものの水質などを維持するだけでなく，このような工夫が凝らされていることは意外だった。

もちろん，野川の水に対する工夫もある。野川について，これまで水に関して 3 種類の努力がなされてきた。その 3 つとは，まず水質の改善であり，もう 1 つが湧き水が減少してきたことへの対策，そして洪水への対策である。水質の対策については先にも述べた。

湧き水の量が減少していることに関しては,「雨水浸透ます」による対策が進められている。三鷹市教育センターの作成したホームページによると，これを利用し一般家屋の屋根に降った雨をきれいなまま地下に浸透させることによって，水量を増やしていくという工夫であるとのことだ。一方の洪水対策は，貯水池と，川幅の拡大という 2 つの方向から対策が行われている。野川のホームページによれば，この内貯水池は雨水が急に野川に流れ込むことを防ぐものとして作られ，もう一方の川幅の拡大についても着々と工事が進んでいるようだが，やはり住民の立ち退きが必要になるケースが多かったようである。

このように，今回の観察から見えてきた野川の姿には，やはり人間の努力の跡が見え隠れする。また，野川のウェブサイトは「自然」「人との関わり」という 2 部から構成されているが，この内後者には，史跡などの情報と共に，現在野川保全のために行われる工夫や対策についても，多くの情報が掲載されている。それは人間の生活を守るためであったり，自然の姿を残すためであったり，と様々な目的を持っているが，これらの行き着く目標は，いずれも人間と自然の共存であると思われる。人の活動の中で，自然はその姿を大きく変えられてきた。洪水対策に高い塀が作られた川もあれば，完全にコンクリートで固められてしまった川というのも珍しくないだろう。もちろん，野川もその源から多摩川に合流する地点まで，そういった部分が全くないかといえば，そんなことはないだろう。野川のホームページにも,「第一貯水池付近を流れる野川」として，人工的な石段，あるいはコンクリートと見られる斜面に挟まれた野川の姿が見られる。

しかしながら，それでもこの野川が人によって大事に扱われているという印象がとても強いのは，やはり水に関する対策，特に水量や水質に関する対策があることや，実際目にした野川の水の透明感や，野川を大事にしようといういくつもの注意書きによるものかもしれない。人々は，ともすれば簡単に川を汚すことができる。それに対して，それを浄化する，というのは非常に難しいことであろう。そのための対策を講じ，実際水をきれいに保つことができているというのは，野川流域の人々が野川を大事にしているということの現れであるといえる。

川には，様々な役割がある。水が海に運ばれる中で，人はその恩恵の一部を得ることができる。たとえばそれは水を利用して水田を作ることであったり，川魚を捕ることであったり，また，水を飲んで，体に取り込むことであったり。また，文明が川から端を発したように，人間の文化的活動，生産活動にとっても，川は重要な存在である。だが，その過程の中で，工場からの排水に苦しむ川がある。生活排水に汚染される川がある。「水に流す」という表現があるように，水は，川は，多くのものを流してくれるが，しかしそれは，人間にとって都合の悪かったものが，川に蓄積され，やがては海に流されていく，ということを同時に意味している。その結果汚染された川は，やがて川としては見捨てられてしまうだろう。そのようなことがないよう，人は川が身近にあることの重要性を常に確かめていく必要がある。

野川はその意味で，非常に（おこがましい言い方ではあるが）恵まれた川である。人も，

動物も，生存のためだけでなく憩いの場としても，野川に接していけたなら，これほど望ましい形は他にないだろう。そのために，人は，これからも野川を，無論他の川についても，大切にしていく方法を，考えていくべきである。

参考文献

三鷹市教育センター　ハケ<国分寺崖線>と野川　三鷹市教育センター <http://www.education.ne.jp/kyoiku-center-mi/river/>（2008 年 1 月 7 日）